

「メキシコ チャパラだより」 349号
島田正治

今、わたしの住んでいるこの「チャパラ、サンアントニオ村とその周辺描く―百景」だが、毎日描きに出るうちに、その数も少しずつたまって、きょう現在四十七作となった。とにかく足のむくまま気のむくまま、どこへ描きに行くというあてもない。家を出る。きょうはこのあたりときめているときはよいが、そうでないときは風景探しとなる。あまり歩きすぎもよくない。あるき疲れてエネルギーを消耗してしまう。ちょっとした気持ちが制作に左右される。微妙である。とにかく「描くのだ」「描ける」と自分を鼓舞し、信じる。失敗は許されない。なんとか一枚の作品にしてくる。描き了えての帰り路は気分のいいものだ。ひと仕事したあとの爽快感である。道すがら眺める風景にも余裕が出てくる。

道端で描いていると、村の人が通る。声をかけていく。中にはいろいろな人がいて、村の情報を伝えてくれる。「このあいだこんなことがあったのを知っているか」「知らない」と言うと「これこれ、然かじか」と。村のニュース、噂話など。

このあいだも、こういうことがあった。最初に住んでいた村のヘスガルシア通り、浜辺に近い家、その道路隔ててワンプロックまるごとといってよいほどの別荘と敷地を有す。この屋敷の庭師をしているヘリペ氏の長女、カルメンがわたしに話すには「このあいだわたしの弟の三男、四男がアメリカから戻ってきた。その三男が新しい仕事を見つけて働き出したが、それがトラックの運転手。つい誤って交通事故を起こして、目下、松葉杖で歩いている。また、悪いことに、ぶっつけた相手の運転していた男を即死させてしまった。」「いま心配しているのは刑務所にほうりこまれるかもしれない。じつは運転の免許も持っていなかった。」「そんなこともあって今、母は寝こんでいる。」と言う。まあ、こんな調子だったが、メキシコのいなかにもいろいろな事件、事故が多い。

これは、また別の話だがもう何ヶ月か前になるが、絵を描いて村の道を歩いているとき、ちょっと異様な光景に出くわした。まさにアメリカ映画ならぬメキシコ映画のロケーションを見る思いであったが、ひとつの捕物帖といってよい。

一台の警察の車が音もたてずに通りすぎて行って、ある家の前に止った。物見高いわたしもその車のあとを追いつくまで行った。パトロールカーの中から婦人警官入れて三人が降りた。共に拳銃を手にして身構える。二つに分れて、ひとりはお堀をよじのぼり、平屋の家の屋上へ、ひとは玄関の戸を押し。この光景は、獲物をねらう虎か豹か、その眼光も鋭い。

一瞬静かになった。何事が起るにちがいない。警察の車がきたので隣近所の人たちも戸をあけて固唾をのんで窺い見ている。そのうち、この家の庭のほうでバタンバタンという大きな音がした。発砲はなかった。この間、二、三分、獲物は捕えられたようだった。手錠をはめられて中から出てきたのは、この家の娘だった。もう三十歳近いと思う。少し知恵おくれがあるのかもしれない。彼女は朝から大声をあげて叫んだり、どら声で歌をうたったりする。聞くところによると、廻りの家の人たちにはまことに迷惑千万で、とうとう警察に訴えられたという次第。村の人たちはみなおおらかに過して、ちょっとぐらいのことは大目にみているのではないかと思ったりするが、現実にはなかなか厳しいものがあるようだ。

(つづく)